

新 おおさか KEYワード 【第10回】

道頓堀はスエズ運河か カフェやバーにも国際色

朝の連続テレビ小説「おちょやん」で、道頓堀が舞台となり、大正時代の町並みがセットで組み立てられているのを見てうれしかったのが、「生粋ブラジルコーヒ」と並んでカフェの看板に「コーヒ エジプト」とあったことである。

そのころの大阪で珈琲を短く「コーヒ」と書いたり発音していたことは、当時の喫茶店のチラシや、服部良一の作曲した「一杯のコーヒーから」（昭和14年発売）で歌われるメロディラインから想像できる。それも面白いのだが、私がこのセットに興味を抱いたのが、店名の「エジプト」である。

大正から昭和初期のモダニズムの時代、明治以来の欧米追随の傾向と同時に、東洋や日本の伝統への回帰もつよく意識された。そのなかにあって「エジプト」のイメージは、そのどちらとも微妙な距離をとって独自のエキゾチズムを漂わせ、街の中に広まっていたらしい。

たとえば、大正7（1918）年頃に刊行された雑誌「道頓堀」（道頓堀雑誌社）のイラストには、戎橋の南詰東側（現在の「かに道楽」の位置）に「家具 エジプト屋」の店舗が描かれる。この家具店は同誌第四号に「エジプト屋 浪花座前電南三七五九」の広告まで載せており、少しは知られた店だったのだろう。



雑誌「道頓堀」（道頓堀雑誌社）のイラストに描かれた「家具 エジプト屋」。左が戎橋で、その南詰すぐ東にあった。

昭和になると、骨董街として知られた八幡筋（現中央区東心齋橋）を堺筋から西に入ったところにも骨董商「エジプト屋」があった。ダルトンの青磁、セーブルの彩陶、獨乙ひげとくりの髷德利、波斯ペルシャの緑釉、希臘ギリシャの古代椅子、埃及エジプトの古代彫刻、路易十四世の青銅の半身像など、海外の焼き物や骨董品が店内に並んでいたという。

大正12（1923）年に開館した道頓堀松竹座のこけら落としも、ルビッチ監督の映画「ファラオの恋」であるし、大正後半に道頓堀中座前の川側に登場した大規模カフェの「第2赤玉」は、階上は「伊太利ベニス情調」、階下は「エジプト風」であることをチラシで宣伝している。道頓堀や心齋橋筋界隈に「カフェエジプト」や「スエズカフェ」などがあったことも、当時サービスで配られていたマッチのラベルからわかる。

大阪でのエジプト趣味の最たるものが、大正15（1926）年、朝日新聞社が中之島に建設した朝日会館である。地

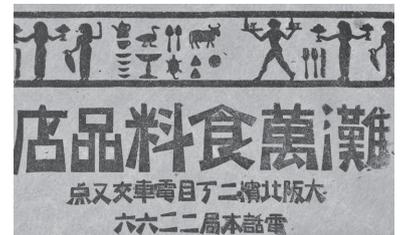
上6階・地下1階で、外観は黒い壁に窓枠が金色にふちどられ、内部装飾と彩色は総て「埃及式」であった。

会館内の劇場の円柱は、紙の原料で「ペーパー」の語源であるナイル川のパピルスの形を模し、壁面には、エジプトの太陽神ラーを讃えた「朝日の讃美歌」をエジプト文字ヒエログリフで刻むほか、考古学者濱田青陵らの助言を得て、エジプト神話の神ホルスや女神ハトホルのレリーフが周囲を飾っていた。エジプトが舞台のシェイクスピア「アントニーとクレオパトラ」やヴェルディ「アイダ」を上演したら雰囲気満点だったろう。

現代のように飛行機で直接、パリやロンドンに到着する時代と異なり、当時、視察や遊学で渡欧する場合、ロシアのハバロフスクからシベリア鉄道（1916年完成）に乗る方法もあるが、海路ならば、船は必ずインド洋からスエズ運河を通して、エジプトのアレクサンドリアなどに寄港する。渡欧した日本人たちは、どこかエジプトの国や文化にも親しみを抱いて帰国したのではなかったか。

北浜の「灘万食料品店」の包装紙もエジプト風で、スポンを商っていたのか、凶案に亀も描かれている。心齋橋にあった「流行の粹社」発行のファッション誌「粹」の創刊号（1923年）にも、「埃及の女」と題された写真が載る。モボ・モガの時代にあっても、エジプト趣味は豪奢かつエキゾチックでお洒落だったようだ。

「コーヒ エジプト」の横にある「生粋ブラジルコーヒ」は、コーヒーの普及のためブラジル政府の援助を受けて道頓堀に実在した有名な「カフェ パウリスト」を踏まえた看板だろうが、芝居茶屋の「おちょやん」が過ごした道頓堀が国際性ある街であったことが、これらの看板に象徴されている気がしてうれしい。



ヒエログリフ風の灘万食料品店の包装紙（部分）。牛や鳥、スポンがデザインされている

筆者プロフィール 橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の現像―」（創元社）など。